



～ 特 集 ～
土と共に生きる 阿久比谷虫供養

板山虫供養(平成25年)

毎年、秋分の日になると町内で行われる虫供養。「名前は知っているよ」「聞いたことはあるよ」といった声は聞かれるものの、新しく転居してきた方、当番のない地区に住んでいる方など、まだ足を運んだ経験のない人もいるのではないのでしょうか。今回の特集では、そんな虫供養とそれらを未来につなぐ町民の思いなどを紹介します。

〈虫供養って何〉

虫供養とは、生き物全ての命を敬い、自然の恵みに感謝する大切な行事です。知多出身で融通念仏の始祖良忍上人(1072-1132)の教えを元に、農作業で犠牲になった田畑の虫を供養するために念仏をしたのが始まりといわれています。平安時代の終わりころから阿久比町でも行われるようになった民俗信仰行事で、800年以上の歴史があります。

〈長い歴史の中で中断も〉

平安時代に良忍上人の教えから広まった虫供養も、天正5年(1577)に坂部城が織田信長の家臣の佐久間信盛の手勢によって焼かれると、治安悪化で中止に追い込まれました。

その後、戦乱が収まった江戸時代に再び行われるようになりました。宝暦6年(1756)には行事が永久に継続できるよう寄付制度が設けられ、寛政7年(1795)には虫供養の道具などを紛失した場合には虫供養の仲間から除外するといった厳しい申し合わせができました。

明治時代には^{はいぶつ きしやく}廃仏毀釈の影響で、またもや一時中止に追い込まれてしまいましたが、住民の強い声で復活しました。

〈県の無形民俗文化財に〉

長く行われてきた虫供養はその価値が認められ、東浦・知多・常滑と共に「知多の虫供養行事」として、昭和58年に愛知県無形民俗文化財に指定されました。その一つである阿久比谷虫供養は現在、町内13地区が1年ずつ交代で当番を受け持ち、今日まで行われています。

〈虫供養の当番地区〉

現在、13地区の順番は次のとおりです。



今年(2017年)は椋岡地区での開催となります。